氏　　名	**中山　淳子**
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	第５５２２号
学位授与年月日	平成　２２年３月２４日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項
学位論文名	**グリムのメルヒェンと明治期教育学ー童話・児童文学の原点**
論文審査委員	主　査　教　授　寺井　俊正　　副　査　教　授　三上　雅子 副　査　教　授　神竹　道士

論文内容の要旨

民族の伝承資料として蒐集されたグリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン』（*Kinder- und Hausmärchen*　1812-15～1857）は、日本では明治時代の受容の当初から傾向的な偏りと歪み（ひずみ）（教訓性重視など）があり、「グリム童話」として矮小化され、伝承メルヒェンの野生やグリム特有の抽象性、香気も失われた。この特殊な現象の原因はこれまで研究されていなかった。本論文は、この原因が、お雇い外国人教師ハウスクネヒト（E.Hausknecht）が演習に用いたヘルバート学派の教授指導書『第一学年』（『第一学年―小学校教授の理論と実際』（Rein,Pickel,Scheller:*Das erste Schuljahr. Ein theoretisch-praktischer Lehrgang für Lehrer und Lehrerinnen sowie zum Gebrauch an Seminaren. Theorie und Praxis des Volksschulunterrichts.*　1878－1885.）にあることを実証的に明らかにした上で、その中心科目である志操教育の教育材料が『グリムのメルヒェン』210 話から 14 話が取り上げられており、その教授法が文部省管轄のもとに日本中に広められた結果、『第一学年』での『グリムのメルヒェン』の扱いが日本の『グリムのメルヒェン』の受容に決定的な歪みをもたらしたことを明らかにした。（以上、第一章・第二章）

文学伝承としては通常ではないこのような特殊な受容のあり方は、また「童話」という言葉と概念を定着させ、明治、大正を通じて現在に至るまでも、童話・児童文学に多大な影響を与えた。本論文は、日本における『グリムのメルヒェン』の特殊な受容の原点とその後の展開をつぶさに検証してその全体像を明らかにし、当時の様々な資料を基に、詳しくその影響を論じた。（以上、第三章）

なお、最後に、『グリムのメルヒェン』受容を論じるのに不可欠と考えられる三者、つまり、原作、ラインらの『第一学年』での教授案、およびその特有な受容を窺わせる明治の翻訳を資料として対比させた。グリムの原話は日本最初の全訳（金田鬼一訳）から、『第一学年』第 6 版の『グリムのメルヒェン』14 話の授業案部分の訳については、上段に明治の日本語訳、下段には論者の原テクストに忠実な訳を対比して掲載した。

論文審査の結果の要旨

グリム兄弟の編纂した『子供と家庭のメルヒェン』は、本来、民間に伝承されてきた民話を後世に伝えるべき民俗的資料として蒐集したものであるが、日本では従来、もっぱら幼い子供を対象とした教訓的な話として受け入れられ、またそれに伴って、さまざまな歪曲や矮小化がなされてきた。本論文は、何故このような偏った受容が一般に定着することとなったのかについて、その原点を明らかにすることをテーマとする。すなわち、明治期初等教育においてドイツのヘルバルト学派の教育方法およびその教授指導書（W.ライン等編纂の『第一学年』）を介して特殊な移入のされ方をしたこと、―そこにその後の偏った受容の原点があったとして、その実態と影響をつぶさに検証するものである。本論文では、さらに、そこからの展開として、ヘルバルト学派の教育を介してのグリムのメルヒェンの受容が、単にグリムのメルヒェンだけでなく、明治以降の日本の童話・児童文学一般にまで影響を与えていることを検証しており、そのことをもう一つのテーマとしている。本論文は三章から構成されており、第一章と第二章は第一のテーマに、第三章は第二のテーマに当てられている。（各章の詳細は省略。）

グリムのメルヒェンが明治期初等教育との関連で歪んだ形で移入されたことは、これまで漠然とは知られていたが、その具体的な経緯等についての詳しい研究は存在しなかった。本論文は、そうした

中、教授指導書『第一学年』の原典ならびにその明治期の（翻案とも言うべき）翻訳の全貌を明らかにするなど、その特殊な受容の実態を膨大な原資料に当たって実証的に究明し、この問題に関わる全体像を論述した。その点、日本におけるグリムのメルヒェン研究に対して貴重な寄与をなし得たものと認められる。また、そうしたグリムのメルヒェンの特殊な受容が、日本の童話観や児童文学の創作に与えた影響を跡づけたことは、この分野においても新たな視点からの新たな知見を提供するものと思われる。総じて、教育学、日本のグリム研究、日本の童話・児童文学研究の各領域に亘る境界領域的な研究として高く評価し得るものである。

以上の所見により、本論文は大阪市立大学博士（文学）の学位を授与するに値するものと認められる。